

小田原の地に根ざして114年
新しい時代に向けた教育の創造

ASAHIGAOKA Senior High School

2017年度版

旭丘高校通信

(Q & A 学校案内)

PART 3 足元からのグローバル教育
—中国編—



河南省 安陽・中国文字博物館 姉妹校 安陽第37中学(高校)

生きる力と結ぶ学びの創造
グローバル時代の私学
高校生の発達と自立を支援



普通科・総合学科

地域単位制総合高校

陝西省 西安・兵馬俑
姉妹校 西安外国語大学附属日本語学校(高校)

学校法人 新名学園 旭丘高等学校



日中高校生の共同作品(今春4月の来日交流にて)

旭丘高校の教育について校長先生に聞く —旭丘高校の「足元からのグローバル教育(中国編)」の特徴について—

Question 1



刑新校長と姉妹校提携の調印式(安陽第37中学校)

校長先生は体験入学セミナー・学校説明会の全体会議でパネルを使って旭丘高校の教育目標を「人間教育」と言われました。また、現在一番力を入れているものは「Think globally, Act locallyの教育づくり・グローバル教育(世界を見据え、地域から行動し考える人づくり)」と言われました。こうした人間教育とグローバル教育との関係について説明して下さい。



張校長と第2次姉妹校提携調印(西安外国語学校)

Answer 1

漢字の源流「甲骨文字」発祥の地・中国河南省・安陽の空の下から

私は、今 中国河南省安陽に出張しこの地におります。先日の旭丘高校ホールでの学校説明会でパネルを使って説明した漢字の起源となる「甲骨文字」*が発見された中国の八大古都**の一つである安陽市におります。この地は首都北京から450kmの所にあります。昨日11月1日(火)に旭丘高校と安陽市第37高等中学(日本の高校に当たる)とは姉妹校協定を交わしました。これは、三年前にやはり姉妹校提携を結んだ同じ中国の八大古都の一つで有名な兵馬俑**がある西安市の西安外国語大学附属日本語学校について二番目の海外提携校です。世界史的に見て21世紀の中国は国際的に注目を集めている国です。日本と中国は、古来から「一衣帯水」の間柄であります。旭丘高校の日中高校生交流はすでに訪中三度、来日・来校を二度と積み重ね来年三月には四回目の西安-安

陽訪問、四月には姉妹校二つの高校生代表が三回目の来日・来校をします。これまで旭丘高校から訪中した生徒は全校生徒の代表としての生徒会総務(執行部)、演劇部、書道部、相撲部、剣道部、陸上競技部の代表部員で、来年度は、生徒会代表のほかに吹奏楽部などの訪中が予定されています。

※甲骨文字(こうこつもじ)

河南省安陽市内にあり、中国の殷の時代、亀の甲(こうら)などに古くして刻まれた象形文字。日本の漢字の源流。紀元前15世紀頃から使われていた。甲骨文字が発見された殷墟は世界文化遺産。

※中国八大古都

中国の歴史上重要な古都である西安・安陽・北京・開封・南京・洛陽・杭州・鄭州を指す。日本の京都と奈良などにあたる。

※兵馬俑(へいばよう)

陝西省西安から東30kmにある。秦の始皇帝(BC221~BC210)陵の副葬坑。7,000以上の等身大の兵士と馬の人形が発掘・展示されている。世界文化遺産。

旭丘高校の国際交流の特徴 —授業と演武を通じた教育・文化・スポーツ交流—

本校の訪中生徒代表団の活動の特徴の一つは、授業と演武を訪問地中国の姉妹校で行い、日本文化や武道の交流を図った点です。演劇部は小田原の地とゆかりのある歌舞伎18番「いろいろ売り」を学校での「表現」の授業と同じ形式で行いました。また、相撲部と剣道部は、それぞれの選択授業での武道の内容についての実演を行い、心・技・体三位一体の日本の礼の心を中国の高校生に伝え、中国の高校生に共感を与えました。

また中国最初の王朝を創出し治水神としてあがめられてい

る夏の禹王の碑が西安の碑林と日本・南足柄市の酒匂川上流の大口・福澤神社にあることから、碑林の“禹王碑”(岫嶼碑)の碑文の読み取り授業を日中高校生とで共同授業として行い、労働・協働の意義と国のリーダーとして高い道徳性と技術力・指導力を持つ禹王の存在と人間像について学び合いました。

そして、日中両国の高校生とともに滞在先はホームステイ方式を取り、授業交流とは異なる、それぞれの国での生活文化の体験をしました。日本でのホームステイ先は、西湘日中友好協会のご協力を得て、これが進められました。

国や言葉は違っても心は通う 同じ世界を生

旭丘高校の国際

Q2 旭丘高校の国際交流の特徴の一つである授業交流についてさらに詳しく聞かせてください。

A2 中国で交流授業を行った二人の先生の感想を紹介します。

★旭丘高校の授業でも日常行なっている「創作うちわづくり」を行い、両国の生徒たちとも生き生きとして、この授業にからだを心を開き、知と生活の交流が深まりました。書道や漢字は中国がルーツであり、その中から日本独自の仮名やカタカナが創り出され、いまの日本語となっています。その中国の高校生と日本の高校生が書道の授業を通して文化の交流ができたことはとても意義深いことでした。

(書の授業者：芸術科・秋山公樹先生)

★礼法と竹刀操作をメインとし、日本の伝統的武道の精神と技を伝えるよう務めました。言葉の問題が不安でしたが、思った以上に、特に西安外大の日本語学科の生徒たちは日本語の理解が早く、生徒の皆さんはとても真剣に武道の授業を受けとめてくれました。私自身、改めて剣道の心と基礎・基本の大切さを見つめなおす良い機会となりました。初心に戻って精進していきたいと思っています。

(武道・剣道の授業者：大塚将史先生)



西安外国語学校の歓迎交流会で相撲の演武米中の生徒3人を相手に稽古をつけているのは、11月に大相撲界入りした矢野雄一郎くん



Q3 中国の皆さんを迎えての交流では、どのようなことを大切にしていますか。

A3 これまで4月上旬に西安外国語大学附属外国語学校の生徒・教員が2度、安陽市第37中学校の生徒・教員が1度本校を訪問していますが、その際には、全学と地域との共同で中国の皆さんを歓迎し交流する活動を大切にしました。学内では、相撲や書道などの授業交流、久野・荻窪キャンパスでの生徒・教職員・保護者など総勢約100人による歓迎レセプションを開き、そこでは日中の高校生による様々なパフォーマンスとともにPTAの皆さんからのチラシ寿司とちゃんこ鍋の振る舞いがなされました。また、同窓会館で行われた同窓会の皆さんによる茶道体験も好評でした。同時に、小田原市長への表敬訪問、西湘日中友好協会が主催する「日中友好の集い」への参加、地域の方の協力による酒匂川文命東堤碑でのフィールドワーク授業など地域と連携した交流が展開されました。

VOICE

来日した中国の生徒の感想

日本と中国は2つの国ではない

私にとって日本は初めての外国旅行です。でも皆さんは、まるで私の家族みたいです。私から見れば、日本と中国は2つの国ではありません。私たちは、何か…最近いつも言っているように、源は同じだと思います。



日中の高校生(お別れ会にて)

今は、日中関係が…(涙で言葉が途切れる)…日中関係は今あまり良い状態ではありません。でも日本と中国の間は、本来はこういうようなトラブルは起こさないとはいえません。私はこれからも、皆さんと仲良くしようと考えています。日本で出来たたくさんの友だち、大切にします。皆さんのことをずっと覚えていきます。ありがとうございます。

(お別れ交流会で、西安外国語学校の王くん)

一衣帯水の長い友好交流の歴史の中で

—水野浩学校長の今春3月訪中・歓迎会での挨拶から(抄)

いま私たちは「母なる大地」青龍寺(せいりゅうじ)で修行した日本の名僧空海やこの長安の都で上級官吏として活躍した遣唐使・阿倍仲麻呂の記念碑が残るここ陝西省西安の地に「里帰り」しています。日本文化の源流である中国古代文明などに直接触れることができ、深い感銘をおぼえています。

中国と日本は一衣帯水の間柄で、2000年以上の昔から現在まで、1894年の日清戦争から1972年の日中国交回復までの78年間にわたるわが国の誤った歴史の一時期をのぞいて、大きくはお互いに信頼関係を持ち、親密な交流関係を深めてきました。今回の私たちの訪問・交流は、そうした長い歴史を持つ友好関係の延長線上にあるものです。

今後、21世紀の未来を拓くこうした日中高校生のスポーツ文化相互交流などを通し、国際的な連携や交流がますます発展し、東アジア・太平洋文化圏の青年・若者たちが大きく羽ばたいていくことを祈念し、私の挨拶といたします。

来日した中国の皆さんが小田原市長を表敬訪問

今春、来日した西安外国語大学附属外国語学校と安陽市第37中学の生徒・教師など総勢16人が旭丘高校の校長先生に付き添われて小田原市長を表敬訪問しました。安陽市長は小田原市長と手紙の交換をし友好交流を展開しています。旭丘高校と安陽市第37中学との協定には、「両校の交流・連携が安陽市と小田原市に所在する学校及び教育機関相互の交流に結びつき、これを発展させるものとなるようにする」との項目が入れられました。



(市長の言葉) ようこそ小田原へいらっしゃいました。市民を代表して歓迎いたします。このような交流の場を設けていただいたこと、水野校長先生をはじめ、皆さんに感謝いたします。日本と中国は海を隔てて長い歴史のスパンで一つの文化圏を形づくって来ました。若い世代の交流はとても大事です。今回の訪問を通じて様々な体験をすることは、中国の皆さんだけでなく迎える日本側にとってもこれからの大事な宝物になると思います。

きる高校生として共に未来を語り合いたい

国際連携教育を通して地球市民として必要な教養を培う生徒たち

Q4 日中高校生文化・スポーツ交流に参加した生徒たちは、どのような学び・成長の姿を見せていますか。

A4 この間の交流を経験した生徒たちの感想文を読むと、これまで否定的だった中国観・中国人観を転換させ、異文化の価値を肌身で受容的に感じとっていることが読み取れます。2014年度生徒会長の福島幸栄さんは第一次訪中で、「国や言葉は違えども、今回の交流で心を通わせることができました。これから次世代を担っていく高校生として、一緒にアジア・世界の社会や歴史の問題を考えていきたい」と述べ、共にグローバル化時代の未来をつくる立場へと自らの視点を高めています。

今後も更に学術・教育・文化・スポーツ等の友好的な交流を進展させ、現代（いま）を生き、未来をつくる生徒たちに、このような地球市民として必要とされるものの見方・考え方を身につけていってほしいと願っています。

Q5 国際連携教育を今後どのように発展させていこうと考えていますか。

A5 本校の国際連携教育（足元からのグローバル教育）は、学校づくり・地域づくりと結びついてこれが発展しているところが他にはない特徴であり、積極面である自認しています。今後もこうした点を大切に、具体的には、①日・中・韓・モンゴル・米など漢字文化圏と太平洋文化圏へと交流のフィールドと学びの視野を広げ、②国際連携教育の発展と結んで本校のカリキュラムに位置づけた中国・韓国・イタリア・モンゴルの言語と文化に関する選択講座の充実、③インターネットを利用した日常の授業交流、④交換留学生制度の創設、⑤姉妹校と連携した学習旅行としての海外修学旅行の実施などを図るとともに、⑥引きつづき本校の国際連携教育の取り組みを通して地域・市民・行政レベルの国際交流の発展に寄与していきたいと考えています。

Q6 生徒たちの“Act locally”（地域活動）について具体的に紹介してください。

A6 生徒たちは「小田原のまちを教室」として教科（授業）・教科外（生徒会・クラブ等）の両面にわたって様々な地域活動を展開していますが、ここでは3つの活動を紹介します。

VOICE 生徒たちの声

海を越えて交流できたことが自信に

●正直なところ中国に行くまでは何となく先入観があって怖くて冷たい国という印象がありました。しかし、実際に中国へ行き現地で生徒やホストファミリーの皆さんと直に対話する中で、中国は私たちが思っていたよりも暖かい人間的な国だと知りました。



切り絵で交流する日中高校生

●同じ地球上でもまだ知らない世界や文化がたくさんあるのだということを知り、その一部を肌で感じることができました。海を越えて交流できたことは自分たちにとって自信になり、これから次世代を担っていく高校生として一緒に世界の問題を考えていきたいと思いました。



▲地域と結びちびっこ相撲教室一大相撲伊勢ヶ濱部屋を迎えて。相撲部は今夏インターハイ鳥取大会に出場。

▼地域で活動するダンスチームがヒップホップダンス世界制覇。総合学科2年生の田中沙来（さら）さん参加。（写真は2016年度文化祭のステージにて）



▲地域の道場に呼びかけ約80人の少年・少女が集まった剣道錬成会。（第2校地体育館にて）

2016.3.23一日中米三国の高校生で交流会（プログラム）

—旭丘高等学校・Gould Academy校・西安外国語学校—

●歓迎式 15:20—15:40

- ①西安外国語学校長・張懷斌先生より挨拶
- ②旭丘高等学校長・水野浩先生より挨拶
- ③アメリカGould Academy校・教師代表より挨拶
- ④プレゼント交換



●文芸公演 15:40—17:20

- ①チアリーディング応援ダンス（西安外国語学校）
- ②ダンス「染付」（西安外国語学校）
- ③ダンス「Start dash」（西安外国語学校）
- ④中国功夫公演（西安外国語学校）
- ⑤相撲公演（旭丘高等学校）
- ⑥合唱「蛍の光」（三校）



2016年3月25日、中国河南省安陽市の「第37中学（高校）」の総合グラウンドで旭丘高校生徒代表と1,200名の第37中学（高校）生との高校生交流会が実施されました。

新名学園私学教育研究所での学術交流も展開

千葉大学名誉教授の三輪定宣新名学園私学教育研究所所長は、これまで二度水野理事長・学校長とともに中国を訪れ、2014年11月には西安外国語大学で「日本の教育制度と大学・大学生」と題した講演を、2015年10月には安陽で開催された国際漢字会議の機会に安陽師範大学で「日本における教育と漢字・漢字文化」と題した講演を行いました。講演の後には関心を持った大学院生が三輪先生を囲み、その後講演内容を中国語に翻訳した出版物も作られています。



国際漢字会議（安陽）にて



旭丘高校にしかないユニークな授業（その3）

ー中国最初の夏王朝の初代国王・禹王の事蹟から学ぶ 日中高校生共同フィールドワーク授業ー

中国最初の王朝・夏の初代皇帝である禹王（BC2007頃）は、中国では治水の技術に優れた徳の高い王として広く知られ、中国の教科書に載るとともに中国全土に約1000箇所以上の遺跡・碑文が存在します。そして禹王のことは古くは古事記などによって日本にも伝えられ、日本全国100箇所近くで禹王を顕彰する碑などが見つかっています。旭丘高校では、こうした禹王の事蹟を通して日本と中国の歴史的な関係を学ぶ授業が、禹王研究会の会員である水野浩理事長・学校長と池田米造元副校長の指導・助言のもと、堀内文兵現副校長の手で中国・西安と日本・酒匂川を結んだ日中高校生の共同フィールドワーク授業として実践されました。今後安陽の周の文王陵にある禹碑前でのフィールドワーク授業も予定されています。

現在の日本の元号「平成」が禹王の業績のについて書かれた『尚書』・大禹謨の中の「地平天成」の言葉から取られたことも知るなかで、参加した西安外国語学校の生徒は、「自分の国の文化を見直すと共に、深く長い中日両国の友好・交流の歴史があることが分かりました。こうした学びをもっと深め、日本と中国をつなぐ架け橋をつくりたい。」と感想を述べました。

※4月、中国の生徒たちの来日・来校の際には、南足柄市の大口にある福澤神社で、地域の禹王研究会会長であり足柄歴史発見クラブに所属する大脇良夫さんの協力を得て、禹王を治水神として祀った酒匂川文命東堤碑の読み取りをするフィールドワーク共同授業が行われています。

●中国・西安の碑林博物館にて

翌年3月、西安外国語学校の先生方の協力のもと西安の碑林博物館で本校教員が日中の高校生約30人に対して、禹王の事蹟を記した碑（禹碑・岫嶼碑）から「指導者としての禹王像」「禹王の業績を通じた日中両国の歴史的な交流」等を読み解く共同授業を行いました。



西安・碑林博物館にて



日本・酒匂川にて

モンゴルからの留学生を迎えて

本校総合学科進学クラスの特別奨学生制度にスポーツコースを設置したことに伴い、この4月に相撲にかかわるモンゴルからの留学生（入学生）を受け入れました。学園として単に相撲の選手を迎えるということにとどまらず、留学生が両国間の教育・文化・経済の交流を担うリーダーとして成長していけるような学びを保障していきたい、さらに今後の留学生制度の整備につなげていきます。

VOICE

生徒の声

ホームルームの班活動で一緒にになり、モンゴルの2人とのコミュニケーションも増えました。日本語はまだただけど英語は何となく通じるんです。英語ってすごいと毎度思います。今はまだ話し初めの赤ちゃんのようだけど、日本語でお互いに話せるようになるといいなと思います。英語を使って何て伝えればいいのかと考えるたびに和英辞典が手離せません。自分の英語力も伸ばせるチャンスだと思うので、これから3年間一緒にがんばりたいです。

（留学生を迎えた4月に、同じクラスのHさん）



北京・天安門広場 故宮・紫禁城



西安・始皇帝兵馬俑見学

グローバル教育に関するカリキュラムも充実

旭丘高校の選択科目には、現在「中国語初級Ⅰ・Ⅱ」「中国のことばと文化Ⅰ・Ⅱ」「初級韓国語」「初級イタリア語」「モンゴルのことばと文化Ⅰ・Ⅱ」「異文化理解Ⅰ・Ⅱ」が開講されるとともに今後更に国際化に対応したカリキュラムの進化・充実が予定されています。

VOICE

生徒の声

王菲（わん・ふえい）先生の「中国語初級」を受講して

3月の訪中のとき、中国の皆さんが日本語で話しかけてくれたのに、4月に来校した時には中国語で答えてあげられず申し訳ない思いでいっぱいでした。

そんな気持ちから中国語講座に挑戦しました。王先生はとても明るく優しい先生で、身近な生活の中から題材をとって教えてくれるので分かりやすいし、語学だけでなく中国の文化のことや中国と日本のつながりのことなども教えてくれようとする思いが伝わってきます。ちょっとした日常会話は出来るようになり、授業が終わると友達と中国語で会話して遊んだりします。大学に進学してからも中国語の学習を続けていきたいなと思っています。

（2015年度生徒会長 北野絵里香さん）



「モンゴルのことばと文化」講座
ムンク・ジルガラ先生



モンゴルからの2人の留学生
ダライくん（左）・チョイジルくん（右）

旭丘高校を受験されるみなさんへ

ー学科・コース・カリキュラムと入試制度の主な特徴ー

旭丘高校の教育づくり・学校づくりは、二つの学科（普通科と総合学科）と二つの校地（城内キャンパスと久野・荻窪キャンパス）の特性を活かし、小田原のまちを教室と見立て、一人ひとりの生徒の多様な発達と進路の求めに応える教育制度と教育課程（カリキュラム）とを整備しています。

多様な求めと個性を尊重する普通教育

普通科ー普通科全体の教育課程を一般クラスと学び直しと進路を拓くクリエイティブクラス〔A（2クラス）・Bクラス〕に分けて編成ー

高等学校学習指導要領に基づく普通教育に関する科目を中心に学ぶ普通科の教育課程は、一人ひとりの生徒の発達と学び、進路力の状況に合わせ、一般クラスとともにクリエイティブクラスを設置いたしました。クリエイティブクラスは、とりたてて基礎学力の回復に重点を置き、それを土台に積極的に進路・進学を拓く総合的・発展的な学力を培うクラスです。他者との「交わり」を通して豊かな「言語」能力を回復する授業や「数量」の認識を日常生活と結んで形成する授業がカリキュラムの中に位置づけられています。A（2クラス）・Bクラスとも「数量」（数学）と「言語」（国語）が配置され「学力回復」に時間が必要な生徒をAクラスに組分け、2年生でAとBの組分けを行います。（習熟度別クラス編成）

進路を見据え、個性を開花させる総合学科教育

ー大学進学クラス（学業進学クラスとスポーツ進学クラス）と進路探求クラスー

総合学科全体のカリキュラムは、共通履修科目と総合選択・自由選択科目により構成され、グローバル教育・キャリア・進路・進学教育づくりに向け、「情報」「ビジネス」「国際」「福祉」「アート」「スポーツ」など分野別系統的な学習ができるようになっています。総合学科には進路探求クラスと大学進学クラスがあります。**ニュース** 大学進学クラスには2017年度より既設の学業クラスに加えて新たにスポーツクラスが設けられます（各30名募集）。また、主にこの2つのクラスに対応して、二種類の「特別奨学生制度」（主として学業に関するものと、主としてスポーツ・個性に関するもの）があります。

※普通科に在籍し、総合学科進学クラス（学業クラス）に学んで大学進学を目指したい人へ

2017年度より、大学進学・学業クラスをミックス・ホームルーム編成とし選択科目を工夫することで普通科の教育課程も履修できるように学科制度を改革しました。

不登校生徒の再チャレンジをサポートする

ベーシッククラス（総合学科・普通科）2クラス

ベーシッククラスは不登校生徒の再チャレンジクラス。ベーシッククラスでは、「学び直し」・「交わりと自立」・「進路を拓く力」を重視する全日制課程のカリキュラムを編成。さらに、ホームルームでの諸活動を通して閉じた身体と心を開き成長していきます。このクラスから毎年60%以上の生徒が大学・短大・専門学校への進路を拓いています。例年このクラスへの志願者は総合学科が8割、普通科が2割という傾向になっています。このクラスは総合学科と普通科のミックスクラス編成となり、久野・荻窪キャンパスを中心に活動します。

新設 総合学科大学進学スポーツクラス のカリキュラムの特徴

総合学科カリキュラムの特徴を活かし、「①大学進学のための基礎となる普通科目群」と「②体育・スポーツ・健康分野の科目群」をバランスよく履修できるようにします。

- 体育・スポーツ・健康分野の科目では、「科学的なトレーニング実践」「基礎理論（身体科学）」「専門的実技（実践）」「スポーツと進路に係る学習」等の内容の科目を配置します。
- 高校でのクラブ活動を支える自らの身体のケアについての学習も位置づけます
- 午後の専門的実技の選択授業とクラブ活動を一体的に行い、地域連携や外部講師も活用して学習・トレーニング活動をつくります。総合学科カリキュラムの特徴を活かし、「①大学進学のための基礎となる普通科目群」と「②体育・スポーツ・健康分野の科目群」をバランスよく履修できるようにします。

NEWS

高校3年間で進路・進学のさまざまな分野を見出す総合学科進路探求クラスに、スポーツ・からだ・健康関連の教科を数多く配置・履修できる「スポーツ類型」があります。高いレベルでの大学進学スポーツクラスとは異なり、スポーツ教科目を数多く履修することが出来、進学・進路を余裕を持って見出す総合学科進路探求クラス・スポーツ類型（コース）が来年度から始動します。

卒業生の最近の主な進路先

- 【大学】青山学院大学・亜細亜大学・桜美林大学・学習院大学・神奈川大学・関東学院大学・上智大学・順天堂大学・東海大学・東京工芸大学・東京理科大学・東洋大学・日本体育大学・日本文化大学・文教大学・筑波大学・帝京平成大学等
- 【短期大学】小田原短期大学・鎌倉女子短期大学・湘北短期大学・白梅学園短期大学・帝京大学短期大学部・東京交通短期大学・東京農業大学短期大学部・日本大学短期大学部等
- 【専門学校】小澤高等看護学院・神奈川社会福祉専門学校・湘南平塚看護専門学校・情報科学専門学校・横浜高等教育専門学校
- 【主な就職先】アサヒ製作所・足柄乳業・市光工業・佐川印刷・武部鉄工・ちほりチボー・東洋会・ファイブフォックス・フジダン・MYコミュニケーション・やまか・横浜ゴム・吉池旅館

中国の高校生たちの進路づくりの契機となった来日・来校

今、ここ安陽の地で この春来日・来校した第37中学の5人の高校生（男子3名・女子2名）と懇談しています。彼ら彼女らは、まずホームステイ先で日本の家庭（衣食住）の生活文化に触れた印象と体験を「どの家庭でも家族のように温かく迎えてもらい、お風呂やトイレの使い方の違いなど生活習慣の違いも多く、いろいろな体験が出来ました」「日本の料理は中国のどれも熱い料理と違って冷たいものが多く、繊細だと感じました」等と話していました。また「日本の街はきれいで交通体系が組織的によく管理され安全だ」「秋葉原での買い物で日本の物価が高いのにびっくりした」「日本人

は勤勉で手際よく仕事をして働く、交通マナーもしっかりしている」など思い思いの感想が述べられ、「成田に着いた時には日本語がわからず、これが外国なんだと実感しました。自国での生活や文化の視野だけではだめなんだと感じました。言葉の大切さも思い知らされ、帰国してからいろいろな勉強に関心を持ち積極的になりました。大学に進学し、自国の文化をもっと勉強して、もう一度日本に技術関係の学校へ留学をしたいです。」と語りました。来日・来校が彼ら彼女らの将来設計や進路づくりの積極的な契機となっていることを知り、大きな励ましを感じました。



西湘日中友好の集いで自己紹介する中国の生徒たち



旭丘高校の入学式に参列する中国の生徒・教師のみなさん



同窓会がお茶のおもてなし



PTAが食で歓迎

日中高校生文化・スポーツ交流を支える生徒会の参加・自治・学び

日中交流の生徒の側のリーダーは、生徒会総務です。3次にわたる訪中、2次にわたる来日・来校のリーダーとホスト役は、各回とも生徒会総務（今春は、梅林栞生徒会長、比嘉友貴副会長を中心に）が果たし、毎回の訪中・来日の生徒側のリーダー機関としての任を果たしました。

旭丘高校の生徒会活動の基礎母体は、各学年を構成する一つひとつのホームルームの活動です。生徒会の活動や生徒会傘下にある各クラブの訪中・来日や日常の活動を支えているものが全校38のホームルームの活動であると言ってよいと思います。生徒会は、ホームルームを基盤として、地域の文化・スポーツ・環境をつくることにかかわる北条五代祭の武者行列や山王川・久野川一斉清掃活動ボランティア等に参加し、また、学校と市民の共同でこれまで22回にわたって開催して来た公開まちづくりシンポジウム参加やPTA・父母懇・同窓会・理事会・評議員会と共に参加する全学協議会でも事務局

役を務め意見表明を行う等、“Act locally”（地域活動）の活動を大いに展開しています。さらに、生徒会傘下にある相撲部は学園と協力・共同して第2校地で地域のちびっ子を集め、「地域少年相撲教室」を毎週夜間に実施し、剣道部も今夏「地域剣道教室」を第2校地体育館で開き、地域とのつながりを深めています。さらに、今後は現在普通科・総合学科の選択科目の中にある中国語・中国文化受講者の研修訪中も計画されています。

受験生の皆さん、旭丘高校の「足元からのグローバル教育」をこのQ&Aで大いに知っていただくとともに、日中高校生文化・スポーツ交流活動を支える存在としての「参加・自治・学び」のスローガンを持つ旭丘高校生徒会活動に注目して、是非この学校に居場所、学び場所、活動場所を発見してほしいと思います。



日・中・米3国高校生文化・スポーツ交流（西安）



中高生は未来を創る一旭丘高校での歓迎交流集会

※中国の二つの地域の高校生との生徒間交流を「切り口」とした旭丘高校の「足元からのグローバル教育」は、近い将来、保者（PTA・父母懇）が参加する訪問団の組織化などが展望されています。

※また、「足元からのグローバル教育」は、西安外国語大学附属外国語学校や安陽市第37中学と現地の生徒間交流で一緒になったアメリカ合衆国やヨーロッパ諸国の高校性との交流を今後さまざまな工夫をこらしながら実現する展望を持っています。

